〈第１章　夢の記述、その方法と経緯〉

1905 年 3 月 18 日[土]

南部（みなみべ）の坂井屋等ぬし惣へ来る。

午下川島氏招きビール飲むこと十二本斗り、それより夕に到り、ぬし惣の宿帳面三四もち田所八穂蔵氏を訪、右の帳の表紙へ陰茎を画く。大にあわて下女とりに来り、渡す。二葉より酒一本ビール三本とり飲む。小光一時間にして去る。川島も去り戸田氏へ之く。予は広畠喜之助氏方に臥す。此内川島、戸田氏と来り予のそばに話す。予之を田所秀穂氏多人数つれ来り予を殺んとすると夢み、闇の中に刀を持ち（三尺余）隣家の庭に忍び、又四季屋（角力取多くのみあり）に入んとせしが止め、ひそかに広畠岩吉氏方後庭より忍び入り、相手を切んとするとき、店の灯光に気付ば、川島、戸田（画字をガラスにかきあり）及岩吉氏あり、刀を闇中柱にさやのまゝ立かけたるが好く気付、正気に復す。喜之助氏帰り入り来り刀持ち去る。喜之助氏に宿す。

（『日記 3』p.14）

第１節，夢を記録し、考察すること

熊楠による夢の記述は、概して非常に詳細である。夢における出来事は勿論、それに関連する場所、人物、時間などを事細かに記している（勿論、中には「〇〇を夢む。」などの一言で終わっているものもあるが)。そして、その「精度」は年を経るごとに増しているようにさえ感じられる。特に、晩年はまさに「夢日記」の様相を呈している。またその記述は、夢は内容のみで終わらないことが多い。様々な角度からの考察が加わるのだ。「夢の出所」や「覚醒時の周りの状況」などを分析し、書き記している。一つの夢をあらゆる角度から描く手法は、まるで、熊楠の膨大な「菌類図譜」を思い起こさせる。一枚の画用紙に、一本のキノコをあらゆる角度から描き、採集場所から形状・色・手触り・匂い・味に及ぶまで詳細にコメントを付けている、あの夥しい数の「図譜」〔写真 1〕である。

キノコは現実に目の前に在るものである。しかし、夢は違う。それは記憶の中に在り、時と共に薄れていく。静物である、採集されたキノコとは異なり、目まぐるしく移り変わり、ときには思いもよらない方向へと展開していく夢の内容を再現することは、非常に難しいことである。

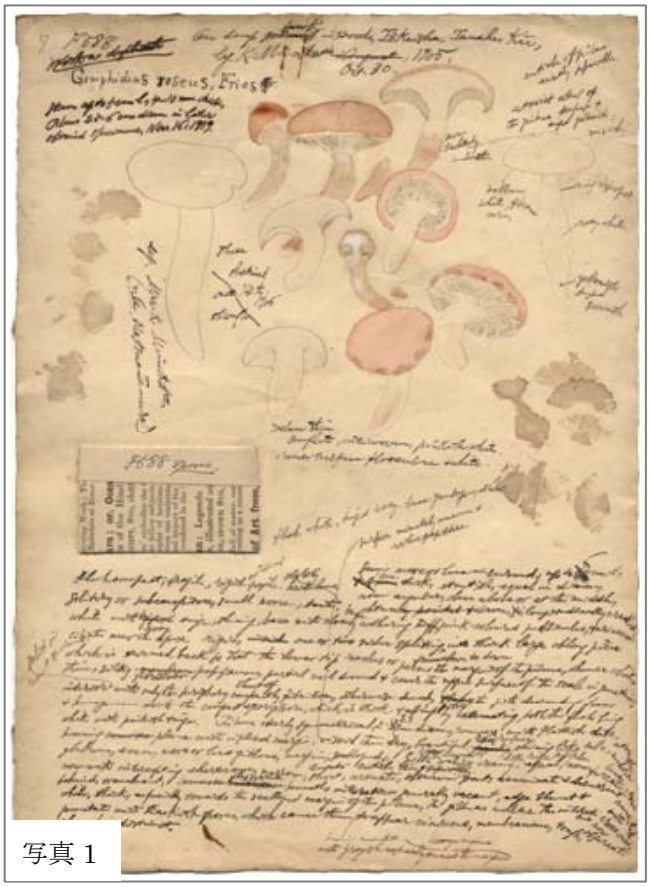


写真 1

熊楠による、オウギタケの図譜（萩原博光解説・ワタリウム美術館編集、『南方熊楠 菌類図譜』、新潮社 2007、p.15）
所蔵：国立科学博物館

そもそも夢を完全に言語化することは可能なのか。否、いくら文章能力に長けた者であっても、それは不可能である。例えば、旅行へ行き写真を撮る。その写真を友人に見せながら「この海岸から見える夕日は本当にきれいだった。」とその情景を詳しく言葉で説明するとする。しかしその友人には、その美しさも感動も、おそらく半分も伝わらないであろう。実際にその場で見た「夕日」と、写真や言葉で説明された「夕日」は、全く異なる。映像（情景）

は完全には言語化できない。それは実際に本人が見て感じるしかないものなのだ。まして、夢は写真に撮ることはできない。思い出して画にしてみても、それは完全とは言えない。驚異的な記憶力を持っていた熊楠といえども、その例外ではない。

夢という、現実よりさらに曖昧かつ複雑な現象を、我々は本当に知ることができるのか。夢を言語化した時点で、それは本当の夢ではなくなっているのかもしれない。しかし、熊楠による夢の記述からは、何とか自らが見た夢をそのまま記録したいという、強い思いが伝わってくる。言語化がどうしても難しい時は図画を用い、また巧みな比喩を用い（ex.天くもり月血の如き色也[1889 年 3 月 5 日付日記]）、時には過剰なまでの情報（ex.和歌山寄合町六番地の旧宅数奇屋[1889 年 4 月 7 日付日記]）などを織り交ぜながら夢を再構築し、記録している。それでもそれらは、熊楠が見た夢そのもの（夢自体）ではないであろう。しかし、夢を語るとは結局そういうことである。むしろ、その夢の再構築の過程が重要なのではないだろうか。つまり、夢を反芻する際、そこに何らかの「意味」を見出していく過程である。そして語られた言葉には「夢自体」を知る何かが隠されているはずである。

我々は、熊楠の夢そのものを完全には追体験できない。しかし、だからと言って夢というものが研究対象にならないわけではない。自分自身でさえ完全には思い出すことが不可能な夢を、熊楠は何とかして記録しようとした。そしてその夢に何かしらの「意味」を見出そうとした。熊楠の、一つの夢をあらゆる角度から考察し記録する方法は、やはり彼の菌類の記載方法と類似している。熊楠によるあらゆる角度からの詳細な考察のおかげで、我々は彼の夢の「背景」を垣間見ることができる。そしてそれはまた、現実の世界における出来事ともリンクしている。夢と現実の（覚醒時の）世界とを切り離すことはできない。形式的には「区別」されていても、それらの本質は「一つ」である。夢には、現実を生きる熊楠とは異なる、もう一人の熊楠がいる。そこには現実の「熊楠」と相補性を成す「アニマ anima」としての熊楠がいる。両者の間に断絶はない。両者はつながっているのだ。それは、一枚のコインの表裏の関係と同じだとも言える。

夢の「背景」を知ることは、現実の世界をより深く知る手がかりとなり、夢の「内容（それが不完全な断片であるにしても）」を知ることは、純粋に反対の熊楠（＝熊楠の「アニマ」）を知る手がかりとなるのだ。熊楠が夢を再構築させていくプロセスは、いわば、もつれた糸を一本ずつ解いていく過程でもある。「果（夢）」という複雑に絡み合った縺れ目から、

わずかに出ている「因」の糸を見つけ出し、慎重に解いてみる。そうすると、そこには熊楠自身でさえ、思いもつかなかった事柄が見えてくるのである。

夢には、起きているときには思いもつかないような事柄が多く潜んでいる。日常（現実世界）における事柄とは全く正反対の事柄が夢では起こり得る。夢においては、熊楠自身が自覚している自己像＝「現実態」の純粋に反対である「アニマ」が生き生きと活躍する。そして、両者は正反対でありながら（否、むしろあることによって）、お互いに補完し合っているのである。両者は共に熊楠自身なのである。

第 2 節, 夢の思い出し方

> 小生夢を見てこれをみずから思い出しひかえ、分析する法を考え出し、いろいろ試むるに、ちょっとした夢にも無量の源因、出所あり。土俗といい言語といい夢のごときもので、しかも一人の見た夢でなく、千古来に億兆人の夢み想い来たりし結果なれば、一つの土俗、一つの言詞にも、無量の来由ありと知るべし。
>
> [1911 年 10 月 13 日付柳田国男宛書簡]（『全集 8』p.174）（傍線―唐澤）

熊楠は、夢を思い出し分析する方法を考え出したという。ちょっとした夢にも無数の「原因」、そして無数の「出所」があるという。第 3 章では特に、この夢の「原因（外的・物的要因）」と夢の「出所（内的・心的要因）」を議論の中心に据える。熊楠は、土俗（神話・伝説）などにも、夢と同じように「原因」と「出所」があるという。しかし、それらは、長年多くの人々が夢を見、想い、考えてきた結果（いわば、多くの人々の夢の合成）であるので、一人の夢よりさらに複雑に、そして無数に「原因」と「出所」は絡み合っている。熊楠は、自身の夢の考察方法が、神話や伝説の研究の基礎となると考えていた。熊楠は、夢と神話・伝説の類似性について、他の箇所でも、以下のように述べている。

> But in its deed, the myth only vies with the dream in its causes, often too multifarious and too complicated for entitling us to disentangle whatever antecedent from what were superadded to them later on; whilst some of these

causes have acted and reacted repeatedly upon one another as a cause and effect; and the others now have entirely lost visible traces in their combined resultant. Much precautioning myself with these more or less unavoidable difficulties, I will now recapitulate the above-given arguments, and pronounce the following as a very approximate truth put in a readable sequence.

[1903 年 3 月 31 日　“The Origin of the Swallow-Stone Myth”（「燕石考」）]

（『別巻 1』p.16）（傍線―唐澤）

しかし全くのところ、伝説はその原因があまりにも多様で複雑な点で、またそのために先行するものを後になって追加されたものから解きほぐしにくいという点で、まさに夢に匹敵するものである。ところで原因のあるものは、くり返し果となり因となって、相互に作用しあう。そして原因の他のものは、組み合わされた結果のなかにとけこんで、目に見えるような痕跡を全く遺さないのである。このように多少は避けがたい困難を充分に自戒しつつ、上述の議論を概括して、なるべく真実に近いものを、読みやすく筋道だてて以下に述べてみよう。

[岩村 1979：371]（傍線―唐澤）

伝説というものは、その「原因」が非常に多様で、複雑に絡み合っている。伝説は長い間語り継がれ、ある時はオリジナルに追記（もしくは脚色）がなされ、それが世に広まる場合もある。オリジナルの伝説の「原因」や「出所」を探すことでさえ困難を要するのに、追記（脚色）されたものから「原因」や「出所」を追究することは、さらに難しいことだと言える。夢も同様で、さまざまな「原因」と「出所」が結果となり、さらにまた原因となって、複雑に錯綜している。

上記抜粋を読んでも分かる通り、熊楠は夢と伝説・神話を、類似するものとして捉えていた。それは夢の考察方法を、伝説や神話の研究に応用できると考えていたことを意味する。では、この複雑に錯綜する夢を、熊楠はどのように思い出し、考察していたのだろうか。

しかるに、小生は多年間夢のことを研究す。銭もなにもいらぬ研究ゆえ面白し。これにはいろいろ経験せしが、すべて夢さむるときに身をちょっとでも動かせばたちまち忘るるものなり。故に小生はもっともくせを付けて、夢さめてのちすぐにとび起きてこれを筆するよりは、依然として夢みしときの位置のままに臥しおり閉目すれば、今見し夢の次第を記臆し出だし得るということを発見せり。たぶん夢見るときの脳分子は不定の位置を占めおれば、ちょっとでも動けばその順序常に復するというようなことと存じ候。さて小生は多年の間かくして多くの夢を記しおけり。

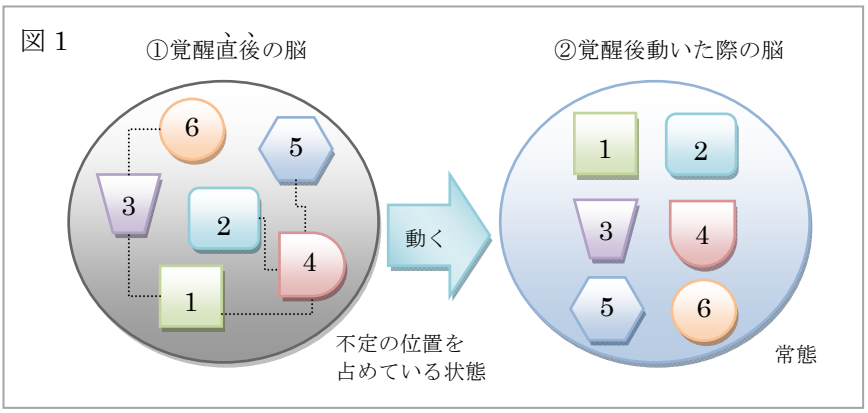
［1893 年 12 月 21～24 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.142）（傍線―唐澤）

熊楠は夢から覚めた瞬間、飛び起きてこれを記録する方法をとらなかった。目が覚めても、夢を見たときの位置のまま動かず、再び目を閉じるという。すると、今見た夢を思い出し記憶することができるというのである。この方法が本当に、果して有効かどうか（少なくとも、熊楠にとっては最も有効な方法であったようだが）は疑問が残るが、熊楠はこれを「発見」だと述べている。

夢の記憶を保つために広く行われている方法が夢の日記であって、目をさますと同時に、思い出せる限りの夢をこれに記録する。夢の日記をつけている人々の間では、この記録は、別の考え（たとえば、これから始まる一日についてのさまざまな考慮といったもの）に妨害されないうちに、すみやかに書き記さなければならないと一般に言われており、対照例との比較研究によれば、これが本当であることは経験的に証明されている。たとえば、ある実験では、参加者は、覚醒直後に電話で地元の天気予報を聞き、夢の記録に先立ってその予報の内容をいくつか書きとめるよう指示された。この作業を行った被験者は、最初に気象台に電話などしないでただちに夢を書きとめ始めた参加者に比べて、ずっと少ない夢しか思い出すことができなかったのである。

［Lewis 1996, 塚本他訳 2005：111］（傍線―唐澤）

上記『夢の事典』によると、夢の日記をつける際は、目を覚ますと同時に、思い出せる限りの夢を記録する方法が、「主流」となっているようだ。他の考え（雑念）に邪魔されな



いうちに、速やかに書くことが「一般的」とされている。

しかし熊楠の場合、目を覚ますと同時に夢の内容を記録することはない。その理由は、「夢見るときの脳分子は不定の位置を占めおれば、ちょっとでも動けばその順序常に復する」からだという。つまり、まだ「限定」を受けていない「脳分子」は、動くことで「日常」という「限定態」に戻ってしまうのだ。ここで言う「脳分子」とは、夢の「原因」や「出所」となった「内的・心的要因」や「外的・物的要因」のことであろう。もう少し言うならば、それは「心に留まった記憶」や「外界の刺激による感覚」のことである。

〔図 1〕で説明すると、例えば、外界からの刺激の感覚=（6）は、昔の思い出=（3）と連結している（思い出させて夢となる）。（3）は、さらに日中心に留めておいたこと=（1）と連結しており、（1）は、前日本で読んだ物語を思い出させる=（4）。またそこに外界の刺激=（5）が影響し、（4）が脚色され、別の思い出=（2）と結びつく。〔図 1－①〕

（1）～（6）は、脳の中でバラバラに（不定に）あり、細い線でつながれている。熊楠によると、この状態を保ちつつ、夢はそのまま再現されなければならないという。少しでも動くと、（1）～（6）の順序は「常態」に戻ってしまうのだ。それぞれの細い線は切れて、（1）～（6）は「整列」してしまうのである〔図 1－②〕。こうなってしまっては、夢を思い出すことは困難になる。その前に、（6）→（3）→（1）・（5）→（4）→（2）順序を、身体（頭）を動かさずに心を静めて、銘記しなければならないのだ。これが熊楠の「発見」であった。

熊楠がこの「発見」を実践していたことは、日記からも分かる。

1911 年 4 月 22 日[土]　晴

此朝多屋勝と竜動にあり、一王宮に至る。前王の御馳走皿に入たまゝならべあり、人なし。

萎え果る花よりもなほはかなきは消て跡なき春の夜の夢

とよみ、頭を動かさずに、とくと記臆しおき、そばにある書籍にかきつく。

（『日記 4』p.38）（傍線―唐澤）

上記の夢を、熊楠は忘れないように「頭を動かさずに」しっかりと慎重に収め置き、そして側にある書籍に書きつけたという。

このような独特な「夢の記憶法」を用いて、熊楠は日記に夢を記し続けていく。

第 3 節, 夢と現実の境

熊楠は、夢から覚めた後も朦朧とした状態、まさに「夢うつつ」の状態にあることがしばしばあった。夢でエキサイティングした気持ちが、目を覚ましてからも、しばらく続くこともあった。例えば、夢か現実か区別がつかない状態で、女中をどなりつけたりもしている（1913 年 10 月 14 日付日記、第 3 章・第 5 節 5-2 参照）。また目が覚めた後も、夢のせいで終日不快になることもしばしばあった。

1920 年 7 月 28 日[水]　晴　暑

朝那須藤十郎氏方の醤油配り小僧予宅地内にて蝉を見て大声揚る。予丁度錦城館の高田品女が林栄吉に嫁して生たる長男が、予に蚯蚓（みみず）〔ママ〕蚓を食はす（鉛山の旅館にて）と夢見居し（これは昨日カウカイビル見し事あり、又常太郎嘗て予の枕本へミミズ置ませうかと言いし事等よりの聯想より鉛山旅宿と錦城館と連なる）が、右の声にて眼さむ。それより午下まで臥し、起出しが、右の事にて夜に入る迄不快。

（未刊行日記・岡本清造翻刻版参照）（傍線―唐澤）

熊楠は蚯蚓（みみず）が大の苦手であった。その夢を見たせいで、夜までずっと不快であったという（因みに、カ（コ）ウガイビル〔笄蛭〕とはミミズに似た大きな蛭のことである）。

このように、熊楠は、我々のように夢を夢として容易に割り切ることができない人間であった。それほどリアルに夢を見る人間だったとも言える。言い換えるならば、熊楠は、

夢と現実の境界線が非常にもろい、あるいは薄い人間だったということである。夢で見た内容は、強烈なリアリティーを持って現実の世界に侵入し、逆に、現実世界での出来事は、堰を切ったように夢の中へ流れ込んでいった。熊楠は、両者（夢と現実）の区別が極めて不鮮明になることが、しばしばあったようである。

以下に示す 1923 年 5 月 28 日の日記には、そのようなリアルな夢で高ぶった精神を、覚醒後何とか抑えようとする熊楠の姿が見てとれる。

> 1923 年 5 月 28 日[月]　晴
>
> 夜讀書しノーツエンドキーリスへ少々状書き、三時半臥す、夢に中孝生如きもの多くと同会す、其一人予に追々歩く、一人予につきとばし見よとか何とかいふ、其者油断より岸に立る所を予つき落す、それより自室に帰るに新入学生如きもの多く、予の夥き書籍標本箱の前に其〔走？〕小荷物を置き居り、予大に困ると見て、夢さめる、其後其夢たるを知り乍らなほ憤る、又マイヤルスの著書に夢さめて後も実事たるを思ひ、憤る例あるを十分憶出す、漸く夢故憤るに及ばずと思ひ直す、時に五時半也、それより起る、
>
> （未刊行日記・岡本清造翻刻版参照）（傍線―唐澤）

熊楠は、「中学校の新入生らしき者たちが、大事な書籍や標本箱の前に荷物を置いたり（走ったり？）して大変困った」という夢を見た。目が覚めた後も怒りが収まらなかったようだ。そして熊楠は、マイヤーズ（Frederick William Henry Myers 1843～1901 年）の本『ヒューマン・パーソナリティー　*Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋 150.12]、[洋 150.13]）に、「夢から覚めてもその夢が現実だと思い憤る事例があること」を思い出す（『ヒューマン・パーソナリティー』は、熊楠のオカルティズムに対する考え方を大きく変えた書物である〔第 4 章・第 14 節及び第 18 節参照〕）。特に「十分憶出す」という言葉に、熊楠が自ら心を鎮めて冷静を保とうとしている様子が伺える。そして、しばらくして「これは夢だから憤る必要はない」と繰り返し思い、何とか心を鎮めることができたようだ。

熊楠にとって夢と現実は、我々のように、明確に区別されたものではなかった。時に両

者の境がなくなる程のものだったのだ。この日記からは、熊楠が必死に夢の世界から現実の世界に戻ろうとしている様子が覗われる。それは言い換えるならば、現実の世界への「退路」を探し、再び元の自己の「ポジション」を再設定するため苦心している姿でもある。

1923 年 8 月 18 日[土]

「夢を見て発狂した男、夫婦とも重傷」

大坂府泉北郡横川村大字福瀬天堀繁太郎三十七才は嫉妬心強く、妻スミとの間に喧嘩が絶えなかつたが、十六日午前六時半頃妻と臥床中妻が他の情夫と通じて居る夢を見て、突然精神に異状を来し、倉庫から金槌を取出して、スミを殴付け、次で己の頭を殴り、夫婦共重傷で手当中

[大正 12 年 6 月 17 日『大阪毎日新聞』切抜]（未刊行日記・岡本清造翻刻版参照）

熊楠はまめに新聞の「切り抜き」を行っている。「切り抜き」は、著名人や知り合いの死亡記事が多い。しかし上記の記事では、ある男が、妻が浮気をしている夢を見て、目を覚ました後、妻を金槌で殴りつけたという事件が記されている。これは 1923 年の 6 月 17 日の記事である（しかしなぜか 8 月 18 日の日記に添付されている）。

なぜ、熊楠はこの記事に関心を持ったのか。夫は夢と現実の区別がつかない朦朧状態で（記事では「精神に異常を来し」となっている）、妻を殴った。あるいは、夫は夢から覚めても、その夢が現実だと思い、妻を殴ったのだ。熊楠も一歩間違えれば、夢から覚醒した後、何らかの「事件」を起こしかねなかったのではないか。熊楠はそれを自覚していたのかもしれない。上述した 5 月 28 日の日記の記述（リアルな夢を見た後、高ぶった精神を必死に抑えようとする記述）のわずか 20 日後の「事件」だっただけに、熊楠にとってこれは単なる他人事とは思えなかったのであろう。

以下に挙げる日記は、熊楠が「夢うつつ」の状態で危うく友人を斬りつけるところで正気になったという記述である。

1905 年 3 月 18 日[土]

南部（みなみべ）の坂井屋等ぬし惣へ来る。

午下川島氏招きビール飲むこと十二本斗り、それより夕に到り、ぬし惣の宿帳面三四もち田所八穂蔵氏を訪、右の帳の表紙へ陰茎を画く。大にあわて下女とりに来り、渡す。二葉より酒一本ビール三本とり飲む。小光一時間にして去る。川島も去り戸田氏へ之く。予は広畠喜之助氏方に臥す。此内川島、戸田氏と来り予のそばに話す。予之を田所秀穂氏多人数つれ来り予を殺んとすると夢み、闇の中に刀を持ち（三尺余）隣家の庭に忍び、又四季屋（角力取多くのみあり）に入んとせしが止め、ひそかに広畠岩吉氏方後庭より忍び入り、相手を切んとするとき、店の灯光に気付ば、川島、戸田（画字をガラスにかきあり）及岩吉氏あり、刀を闇中柱にさやのまゝ立かけたるが好く気付、正気に復す。喜之助氏帰り入り来り刀持ち去る。喜之助氏に宿す。

（『日記 3』p.14）（傍線―唐澤）

熊楠は、（酔い潰れたのであろうか）友人・広畠喜之助の処（料亭「二上り亭」）で寝ていた。そして、飲み友達の田所秀穂が来て熊楠を殺そうとする夢を見た。さらに熊楠は闇中、隣家に身を潜め、田所を斬ろうとしている。店の灯光で正気に戻ったようだ。この記述は、田所が熊楠を殺そうとするところまでが夢なのか、熊楠が田所を斬りつけようとして正気に戻るまでが夢なのか、非常に分かりづらい。おそらく熊楠自身もどこまでが夢なのか、どこまでが現実なのかが分からず、混乱していたのではないだろうか。ともかく、もう少し正気に戻るのが遅かったら、事態は夢で済まなかったかもしれない。そして、熊楠自身もそのことを自覚していたに違いない。[1)]

熊楠は、夢の世界からの「帰還」が、時に困難になることがあった。従って熊楠は、夢の世界の特徴と、現実世界のそれとの相違を、明確に把握しておく必要があったのである。つまりそれは「退路」の確保と言える。両者が不鮮明な状態に居ると、上記日記に見られるように、熊楠は、他者を傷つけかねなかった、最悪の場合、他者を殺しかねなかったのである。今、自分が居る「場所」はどこなのか――熊楠は、それを常に意識しなければならない人間であった。

---

1) 近藤俊文は熊楠によるこの日記の記述について、以下のように述べている。
殺される夢にうなされて起きあがり、おっとり刀で、庭にとびおり、相手を斬ろうとするのだが、あわやのときに気がついて、無事にすんだという経験を述べている。…（中略）…夢から覚醒したあと、この夜の行動をおぼえていたらしいことから、これは夢遊病とは断定できないが、夢中遊行類似の病的体験とはいえるであろう。
[近藤 1996：138-139]

第 4 節, 熊楠に見る「無」と「不安」について

もし、熊楠が夢の世界からの「退路」を見失い、元の自己に戻ることができなかったとしたら、どうなっていたであろうか。夢という場においては、自分が他人になることもあるし、他人が自分になることもある（そしてそのとき自分は傍観者のようにそれを眺めていたりする）。いわば、自他の「区別」が不鮮明になるのである。「眠っているときにはこの区別は中断され、夢みているとき区別は暗示された無となる[Kierkegaard 1844, 田淵訳 1966：238]」。夢――そこは、暗示された「無」であり、未だ真の「無」ではない。自他の「区別」はあくまで中断されているのであり、消滅しているのではない。夢は、自他不鮮明の場である。辛うじて自己を保ちつつも、他者との「区別」が明確ではない状態が夢においてはある。それは、統合失調症の症状と似ていると言えるかもしれない。統合失調症とは、端的に、自己と他者との境界が不鮮明になり、自己の主体性が他者の主体性として、あるいは他者の主体性が自己の主体性として感じられる「病」である。自己の唯一性・一回性・交換不可能性が崩れ、他者が自己へ侵入してくる。あるいは自己が他者へと入り込む。このような事柄が個人の内で起こるのである。しかし統合失調症においては、まだ自己は死んではいない。だから患者は「苦痛」を感じるのである。もし、完全に自己が死んでしまったら、「苦痛」さえない。当然その反対にある「快楽」もあり得ない――真の「無」である。

> この状態には平和と安息がある。しかし同時にそこには何か別のものがある。といっても別に不和や争いではない。事実そこには争いの種になるようなものは何もないからである。ではいったいそれは何だろう？無である。ところで無はどんな働きをするのだろうか？無は不安を生む。無垢が同時に不安であるということ、これが無垢のもつ奥深い秘密である。
>
> [Kierkegaard 1844, 田淵訳 1966：238]（傍線―唐澤）

キルケゴールの言う「この状態」とは、エデンの園における人間の「無垢」な、そして

「無知」な状態である。完全な平和と安息の場（エデンの園）においては、不和や争いはなく「無」があるという。そのような場においては、不和や争いを調停するような「知」を行使する必要がない。その意味において、アダムとエヴァは「無垢」であり、「無知」であった。そしてそこには、争うことができるものが何もない代わりに「無」があるのである。キルケゴールは、この「無」は「不安」を生むと言う。では、そのような「不安」とは一体どのようなものなのであろうか。エデンの園という「無」に巻き込まれているとき、自己は自己を確立できない。エデンの園という「一様性」・「無」から、距離を採り（離れ）、他者を持たなければ、自己は確立できないのである。この私が完全に「一様性」・「無」に吸収されてしまうのではないか、あるいは、この私が完全に消滅してしまうのではないか、これが自己意識を持つ人間の、根源的な「不安」である。

「無」は「不安」を生む――人間は、「支え」も何もない、宙に浮いたような状態に耐えることはできない。故に、人間はそこから逃れるために、自分以外の何かを求める。つまり自己の足場を確立しようとするのである。筆者は先に、「完全に自己が死んでしまったら、『苦痛』さえない。当然その反対にある『快楽』もあり得ない」、それが真の「無」であると言った。我々人間は、この真の「無」に完全に滞留する直前に、「不安」なるようである。自己が完全に消滅してしまえば、「不安」さえ呼び起こされない。真の「無」の一歩手前の「無」が「不安」を呼び起こすと言ってもよい。あるいは、真の「無」においても（そこはエデンの園だが）、人間は、ただ自己以外のもの（＝支え）を定立できない、いわば「夢見る精神[Kierkegaard 1844, 田淵訳 1966：240]」として、実は、その状態を何とか抜け出す機会をうかがっていると言えるかもしれない。そのような意味で、人間は動物とは根本的に異なる。しかしそうは言っても、「夢見る精神」である限り、真の人間でもない。

「夢見る精神」とは、真の「無」に行き留まることも、（再び）自己を（他者を）確立することもできるような**〈中間〉**に居るということである。自己が他者と極端に接近し過ぎず、また極端に離れすぎず「適度な関係」を持てる場を**「中間」**とするならば、**〈中間〉**とは、「無」とこの「適度な関係」を持てる場（現実界）との間の場所なのである。

熊楠は、この真の「無」の一歩手前、あるいは「夢見る精神」の状態＝**〈中間〉**で、自己喪失の「不安」を感じていた。しかし、元の自己へと戻ろうとしても、その「退路」を見失った者は、「夢見る精神」に留まることになる。つまり、真の「無」に近い場所で、自

己をかろうじて持っているような状態に留まることになる。それは、統合失調症の症状と似ている。熊楠は、そうならないように、夢の世界と現実の世界の特徴を把握し、両者の区別を常に認識しようと、必死に試みていたと言える。熊楠が、執拗なまでに夢（と現実の特徴の差異）について日記に記述した理由は、この「退路」を確保するためでもあったのだ。――このように、熊楠が憂えていた「夢見る精神」＝統合失調症が、後に、熊楠自身ではなく、愛息・熊弥が 17 歳で発症したことは、運命の悪戯とさえ思える。

第 5 節，日記における夢の記述の変遷

本節では、年ごとに見られる、日記における夢および「やりあて」に関する、主な内容（特に、本稿において次章以降重要となってくる内容）を見ていきたい。

1888 年：夢に関する記述の開始／羽山蕃次郎の夢（三夜連続）／旧友の夢

1889 年：羽山兄弟の夢（二回）／覚醒時の状況の記載を始める

1891 年：旧友の夢

1893 年：夢の出所の記載を始める／後の「事の学」へつながる「川下り」の夢

1894 年：夢の出所・覚醒時の状況の記載

1895 年：羽山蕃次郎、平岩内蔵太郎の夢

1896 年：母の死に関する「予知夢」

1897 年：羽山蕃次郎の夢

1898 年：羽山蕃次郎の夢

1899 年：羽山兄弟の夢

1902 年：羽山周五郎の夢、地震の「予知」

1903 年：夢の出所・覚醒時の状況の記載／幽冥に関する問答の夢／ソンナンビュール（夢遊病）の記述／羽山蕃次郎の夢

1904 年：「やりあて（予知・発見）」／「幽霊」の記述／羽山蕃次郎の夢（三回）

1905 年：羽山信恵の夢／火事の「予知夢」他

1907 年：覚醒時の状況・夢の出所の記述／「幽霊？」の記載

1908 年：松枝・熊弥が見た夢の記述の開始

1909 年：松枝・熊弥等が見た夢の記述／「南人不夢駝北人不夢象」

1910 年：夢の出所の記載／熊弥が見た夢の記述／羽山蕃次郎の夢

1911 年：頭を動かさずに夢を記憶する法の記述／夢の出所・覚醒時の状況の記述

1912 年：孫文の夢／夢の出所の記述／「夢におそはるゝこと」

1913 年：目良氏長男の死の「予知夢」／熊弥・文枝が見た夢／羽山蕃次郎の夢（二回）

1914 年：夢の出所・覚醒時の状況の記述／テレパシーに関する記述／羽山直記（羽山兄弟の父）に関する夢

1915 年：夢の出所、覚醒時の状況の記述／船の座礁の「予知夢」

1916 年：夢の出所に関する図

1917 年：羽山蕃次郎の夢／夢の出所の記述

1918 年：夢の出所・覚醒時の状況の記述／羽山蕃次郎の夢

1919 年：夢の出所の記述／ロンドン時代の夢他

1920 年：亡父・母の夢（五回）

1921 年：夢の出所、覚醒時の状況の記載／川根米の夢

1922 年：南方植物研究所に関する夢／羽山蕃次郎の夢（二回）

1923 年：夢の出所の記載／東京・日光の夢／夢に関する新聞の切り抜き

1924 年：東京・日光の夢／夢の出所の記載

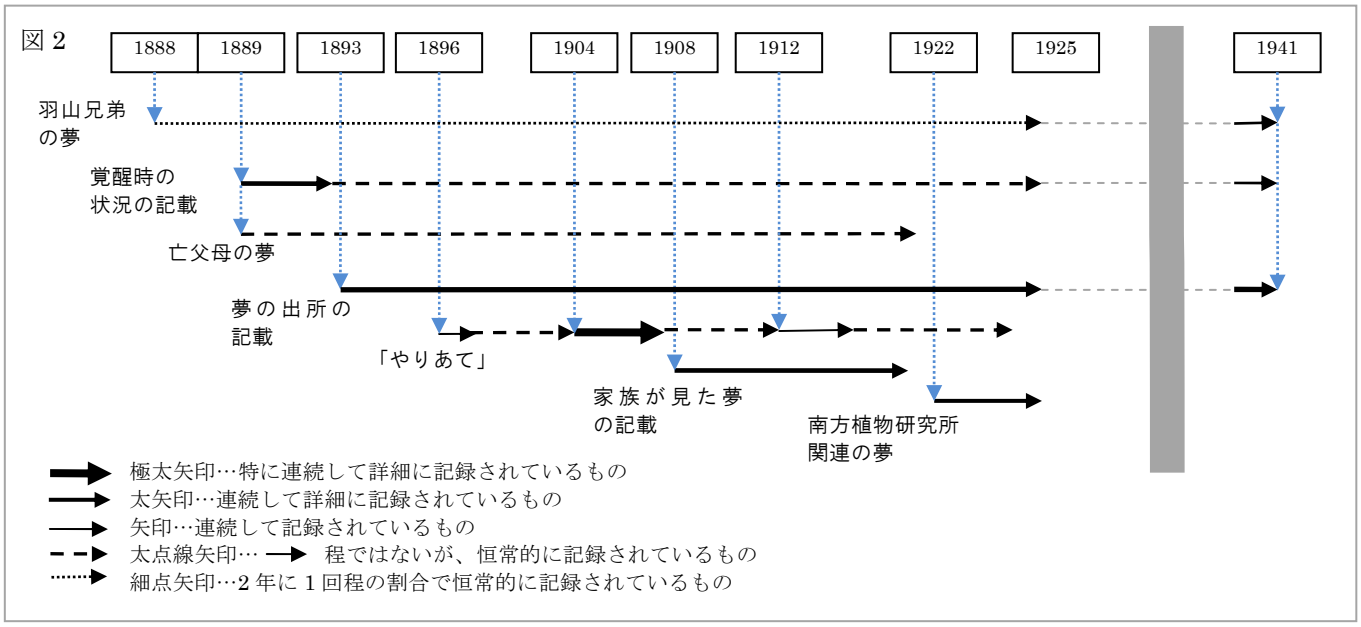
1925 年：「此頃予少しも夢を見ず」

****

1941 年：夢の出所の記載／羽山繁太郎・蕃次郎の夢

〔図 2〕は日記における夢の変遷を表わしたものである。

熊楠が生涯、変らず見た夢は羽山兄弟に関するものであった。勿論、見ていない（あるいは書いていないだけかもしれない）年もあるが、全体としては、青年期から晩年に至るまで、恒常的に見ていたと言って良い。「覚醒時の状況」の記述に関しては、1889 年から始まる。熊楠の夢の考察は、この「覚醒時の状況」を記載することから始まる。これは、1893 年から始まる「夢の出所」の記述と共に、夢を考察する熊楠の手法であった。「夢の出所」の記述は、晩年まで続く。在外中に亡くなった父・母の夢も良く見ているが、羽山兄弟ほどではなかったようだ。



「やりあて」とは熊楠の造語であり、偶然の域を超えた発見や発明・的中のことである。この「やりあて」は、1904～1907 年頃に集中的に見られる。例えば「夢のお告げ」による植物の珍種の発見などである。しかし、その頻度は年を経るごとに徐々に減っていく。結婚してからは、家族が見た夢についての記述も見られるようになる。1922～1924 年には、南方植物研究所関係の夢をしばしば見ている。その他、元・女中の川根米に関する夢や、「夢の出所」に関する図を記した日記の記述も見られるが、詳細は次章以下で述べる。

参考文献

・岩村忍編・訳、「燕石考」、『南方熊楠文集 2』、平凡社、1979

・岡本清造翻刻資料（未刊行 1914～1925 年翻刻分）（南方熊楠顕彰館所蔵）

・萩原博光解説・ワタリウム美術館編集、『南方熊楠 菌類図譜』、新潮社、2007

・Kierkegaard, Søren Aabye, *Begrebet Angest*, 1844／邦訳：田淵義三郎、『不安の概念』（枡田啓三郎責任編集、『世界の名著』第 40 巻、中央公論社、1966 所収）

・近藤俊文、『天才の誕生―あるいは南方熊楠の人間学―』、岩波書店、1996

・Lewis, James R. *The Dream Encyclopedia*, 1996／邦訳：塚本利明・久泉伸世・金里美・鈴木英夫、『夢の事典』、彩流社、2005